

第5学年 社会科学学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「工業生産とわたしたちの暮らし」 教材名「これからの工業生産」

2 単元の目標

工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良していることを理解し、地図・写真・統計・説明資料と調査記録を扱う技能を身に付ける。「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。(3)

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良していることを理解している。 ②地図・写真・統計・説明資料と調査記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。	①「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」について、人々の働きや資料同士の関係に着目し、根拠を挙げて説明している。	①これからの工業生産の学習で生じた疑問について、自分の記録や友達の考えを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

4 指導上の考察

(1) 単元について

「これからの工業生産」は、第5学年の(3)を手掛かりに、人々の働きと社会の仕組みを調べる単元である。中心となる理解は、工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良していることである。名称を覚えて答えるだけでなく、「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」に答えるために何を見て比べればよいかが授業の焦点になる。

本案では、工業の既習からこれからの課題を出すところから始め、生産者の工夫と困難を整理する活動を通して考えを確かめる。結論だけを先に提示すると、観察や資料が答え探しになるため、予想と理由を残してから調べる。単元末には工業の発展について自分の考えを述べることで、学んだ言葉と根拠が結び付いているかを確かめる。

学校の既習と実態は資料だけでは決められない。前の記録を見て、説明に必要な言葉や道具の扱いを確かめる。扱ったことのない内容を既習として書き込まず、必要な確認を導入に加える。

(2) 児童について

(学級の子どもの様子を先生が書く)

(3) 指導について

本時では「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」を中心の問いに据える。安全、環境、使いやすさ、生産の継続に関わる製品改良の事例を調べる。消費者・働く人・企業の立場で利点と必要な条件を整理し、これから大切にしたい取組を根拠付きで選ぶ。

児童の最初の考えを消して正答に直させるのではなく、どの記録で考えが変わったかが分かるよう書き足させる。便利ならよいという主張には製造費用や資源、使えない人の立場も資料から考える。技術だけですべて解決すると断定せず、協力や制度の条件を残す

資料を読むことや書くことが負担になる児童には、比較する箇所を絞った図、読み上げ、指差しや口頭説明を用意する。説明の代筆は児童に内容を確認してから行い、文字量で理解を判断しない。早く説明できた児童には、同じ説明が当てはまらない記録がないかを探させる。

安全と扱いの留意点は次のとおり。企業の広告表現をそのまま評価語にしない。現状の数値は年・単位・対象を付けて扱う

5 指導と評価の計画（全5時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○工業の既習からこれからの課題を出す。 ○製品改良と社会の変化の事例を調べる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第2次	2	○消費者の願いを資料で確かめる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第3次	3	○生産者の工夫と困難を整理する。	知①・知②（記録・活動の観察）
第4次	4 （本時を含む）	○優先したい取組を立場を変えて検討する。 ○安全、環境、使いやすさ、生産の継続に関わる製品改良の事例を調べる。消費者・働く人・企業の立場で利点と必要な条件を整理し、これから大切にしたい取組を根拠付きで選ぶ。	思①（個人の説明・記録）
第5次	5	○工業の発展について自分の考えを述べる。	態①（記録の見直し・振り返り）

6 本時の指導（4／5（配当案））

（１）本時の目標

「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」について、資料の事実を示しながら自分の考えとその理由を説明できる。

（２）学習過程

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 （ 分）	○前時までの記録から「工業の既習からこれからの課題を出す」ときの疑問を取り出す。 ○「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」 【めあて】調べた事実を使い、自分の考えと理由を説明しよう。 ○一人で予想と理由を書き、調べたい点を確認める。 〈予想される児童の反応〉 ・工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良しているのか確かめたい。 ・前の記録と比べると違いが見つかりそう。	・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。 ・企業の広告表現をそのまま評価語にしない。現状の数値は年・単位・対象を付けて扱う
展開 （ 分）	○前時までの観察・調査の記録を使う。以下に示す調べ方を振り返り、本時は問いに関係する記録を比較する。追加の実験・調査は方法を計画し、次時に確かめる。 ○安全、環境、使いやすさ、生産の継続に関わる製品改良の事例を調べる。消費者・働く人・企業の立場で利点と必要な条件を整理し、これから大切にしたい取組を根拠付きで選ぶ。 ○「どの資料の事実から、そう考えましたか」 ○自分の説明を相手に示し、根拠が同じか違うかを比較する。 ○説明できない記録があれば条件や資料の読み方確かめ直す。 〈予想される児童の反応〉 ・同じだと思ったが、比べるところをそろえると違いがある。 ・この記録だけではまだ決められない。 ・生産者の工夫と困難を整理することで、理由を確かめたい。	・便利ならよいという主張には製造費用や資源、使えない人の立場も資料から考える。技術だけですべて解決すると断定せず、協力や制度の条件を残す ・結果に合わない意見も記録へ戻る材料として取り上げ、発言した児童を責めない。 ・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。 ・本時に単元全体の実験や調査をやり直さない。比較する記録を準備し、方法を確認する必要がある部分だけを実物で示す。 ◎思① 「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」について、人々の働きや資料同士の関係に着目し、根拠を挙げて説明している。（個人の記録と説明。交流前後の変更理由を含めて見る。）

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
まとめ （分）	○本時の問いへの答えを、根拠となる資料の事実とともに書く。 【まとめ】工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良している。 ○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。 〈予想される児童の反応〉 ・考えが変わったのは、記録を比べたときに違いを見付けたから。 ・まだ確かめていない条件が残った。	・まとめは確認した資料の事実を根拠に書く。資料によって見方が分かれる場合は、作成時期・立場・対象を確かめ、未確認の点を残す。 ・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。 ◎知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

（３）板書計画

上段に「これからの工業生産」と本時の問い「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」。左側に予想とその理由、中央に実際に調べた事実の記録、右側に事実から考えた説明を置く。中央は条件・時期・対象が分かる見出しにし、比較する記録を同じ高さに並べる。生産者の工夫と困難を整理する際に用いた記録を残し、根拠と説明を線で結ぶ。下段には確かめられたことと、まだ残る問いを分けて置く。発言の多い子の説明だけで仕上げず、個人の記録の違いを残す。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
 みえ先生ラボ

